



Title	コロナ禍の前と後
Author(s)	田島, 節子
Citation	大阪大学低温センターだより. 2022, 172, p. 1-2
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/87685
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

コロナ禍の前と後

大阪大学名誉教授 田島 節子

この原稿を書いているのは、2021年9月28日です。あと二日で全国の緊急事態宣言が解除されます。昨年、大阪大学を定年退職する少し前から、新型コロナウイルスの感染拡大が始まりました。研究科長として、卒業式をどうやって実施するか、退職される先生方の最終講義はどうするか、などいろいろなことに慌ただしく対処し、3月になっても、学外で学生が起こした事件などに関わっているうちに、自分の部屋を引き払う準備の時間もなくなり、結局、週末をつぶして教授室の荷物を片付ける羽目になりました。3月31日は、ゆっくり挨拶まわりなどしようと思っていたら、その日の午後に日本物理学会76期理事会の最初の会合をやるという。副会長としての最初の仕事なのでサボるわけにもいかず、午前中に理学研究科事務局の方々に挨拶して、午後は大急ぎで東京・湯島の物理学会事務局に駆け付けました。低温センターの皆様にも最後ちゃんとお挨拶できなかったことを、大変残念に思っています。長い間、本当にお世話になりました。この場を借りて御礼申し上げます。

こんなドタバタのせいか、はたまたコロナ禍のせいか、定年の前と後がプツッと切られたような感じです。コロナ禍前がまるで「遠い日」のようです。生活は激変し、毎週末東京・大阪を飛行機で往復していたのに、今は東京世田谷の自宅にこもり、電車に乗ることさえ少なくなりました。家人以外とは誰とも会わない完全なる在宅勤務の日々。昨年度まではまだ、指導すべき学生がいたので、何度か阪大にも行きましたが、今年に入って緊急事態宣言が繰り返し出されるうちに、県境をまたぐ移動がためられ、4月以降一度も大阪に行っていません。東京と大阪がこんなに遠くなるとは思いませんでした。

コロナ禍で、大学もいろいろ変わったことでしょう。私がこの1年半運営にかかわった学会も変わりました。問題もたくさんありますが、ここではあえて「コロナ禍のおかげで」良くなったことを挙げてみたいと思います。

この1年半でZoomなどのオンライン会議システムは驚異的に進化しました。「仕方なく」ではありましたが、緊急事態宣言期間中などには、学会事務局職員はほぼ全員在宅勤務となりました。その結果、郵便物の整理や学会誌の原稿校正・編集の作業などのいくつかの業務以外は、在宅でできることがわかってしまったのです。理事会をはじめ委員会等すべての会議は、オンラインとなりましたが、それによって委員の出席率は格段に上がりました。(ほぼ100%!) 委員にとっては、東京へ出張する手間がはぶけ、移動時間ゼロ。学会にとっては、旅費支払いゼロとなって、財政が大いに助かりました。大きな会議室は不要となり、都心で高い家賃を払って借りている学会オフィスの面積は、もしかしたら半分近くに減らせるかもしれない、などと議論しています。コロナパンデミックが終息した後も、このような在宅勤務やオンライン会議の仕組みは、継続されるでしょう。「そのほうがずっと良い」ことに気づいてしまったのですから。

年2回開催されている物理の大会は、4回続けて現地開催が見送られました。しかし、オンライン大会は、回を重ねるごとに改良され、参加者からの評判は上々です。旅費がかからない、移動時間がかからない、というのはオンライン会議と同様。海外からの参加も可能ですし、学内業務で忙しい先生も育児で忙しい研究者も、合間を見て聞きたい講演だけ参加することができます。結果として、参加者数は増えました。以前は、大教室でのシンポジウムで、スライドが見えにくかったり、声が聞き取りにくかったりすることもありましたが、そういう問題点は解消されましたし、人気で満員のセッションを立ち見で我慢することもなくなりました。時間内にできなかった質問をするため休み時間に講演者を探し回る苦労もなくなり、オンラインシステム内のチャット機能で質問できるようになりました。海外から研究者を招待して講演してもらうことも簡単です。もちろん、対面での議論は必要ですし、それを渴望する声も大きいです。ただ、コロナ終息後、この便利なツールを完全に手放すことはないのでは、と思います。

海外の物理学会との交流も、以前より増えました。米、英、独、仏をはじめとする世界10数ヶ国の物理学会代表がオンラインで顔を合わせ、コロナ禍での各国の問題点や解決策を共有したり、地球温暖化防止に貢献するための物理の役割を議論したりしています。ドイツ物理学会は、自国の年次大会に日本物理学会会員を15名無料招待してくれました。日韓合同シンポジウムも韓国物理学会の期間に合わせてオンラインで実施され、次回は日本物理学会年次大会中に行うことになっています。このように海外との交流のハードルが一気に下がったのも、オンライン会議システムのおかげです。以前からやろうと思えばできたのかもしれませんが、コロナ禍が背中を押してくれたと言っていいでしょう。

新型コロナウイルス感染拡大は、私たちが経験したことのない大きな災難であることは間違いありません。ただ、それを乗り越えた先に、これまで経験したことのない、より良い世界が広がっていることを示してくれたようにも思います。大学も、コロナ禍が過ぎた後に新しい発展をするよう、願ってやみません。